



町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

「いないと困る」そんな人になってください

将来どんな政治的、経済的な状況が生じるか、私たちは誰も知らない。未来は、人々の不満、利益追求、逃走、そして今の私たちに想像のできない新たな経済的、政治的、社会的状況によって決まるだろう。

けれども、たった一つ確信をもって言えることがある。すべての厳しく険しい問題は、問題に取り組んでいこうとする人々がいて、彼らにその問題を乗り越えるだけの能力と覚悟があれば、解決されるだろう、ということ。この人たちは、親切で、友好的で、互いに尊重する心を持ち、人を助ける心構えができており、自分に与えられた課題を一生懸命やろうとする意志を持ち、人の犠牲になる覚悟があり、真摯で、嘘がなく、自己中心的でない人々でなければならない。そして、その人々の中に、不平を述べることなく、ほかの人よりもより一層働く覚悟のある者がいなくてはならないだろう。

(1926年著 パーター・ペーターゼン)

今回も中学生のみなさんを想定読者に設定したいと思います。みなさんは「学力」についてどんなイメージを持っているのでしょうか。「学力って何？」に対する回答が、その人の持つ学力観ということになります。大方の人は「学力テストの点数」というイメージを持っているのではないのでしょうか。「まことに小さな国が開化期を迎えようとしている」ではじまる司馬遼太郎の「坂の上の雲」ですが、「社会のどういう階層のどういう家の子でも、ある一定の資格を取るために必要な記憶力と根気さえあれば、博士にも官吏にも軍人にも教師にも成り得た」という一節があります。この時代は、そして、今に至るまで、記憶力と根気を示す方法としては、文字情報を読んでペーパーテストに鉛筆で答えを書くということが偏重されました。つまり、正解にできるだけ早くアクセスできる力を学力と捉えていました。「学力＝テストの点数」と捉える人が多いのはこのような事情によるものと思われまます。テストの点数が、つまり偏差値が学力だとしたら、みなさんは、「できるだけ少ない労力で高い得点・高い偏差値を得る」ことを目指すのではないのでしょうか。いわゆる費用対効果を考えるということになります。「傾向と対策」という受験対策本が売れるのは「コスパ」「タイパ」を考えてのことでしょう。

ところで、経済学での「価値」には、使用価値と交換価値があるということになっているそうです。例としてあげられるのが「水とダイヤモンド」です。「水は使用価値は高いが、いくらでもあるので交換価値は低い。ダイヤモンドは使用価値はほとんどないが交換価値は抜群に高い」ということです。ボートの「水に浮く」という使用価値はいつでもどこでも変わりませんが「夏の終わりの湘南海岸」と「タイタニック号沈没間際」では、交換価値は天地ほど違うということになります。私は、学力にも使用価値と交換価値があるのではないかと考えています。交換価値のある学力とは偏差値でしょう。入試で高得点が得られればいわゆる難関校合格と交換できます。多くのみなさんは、この価値を得たいと思っているのではないのでしょうか。しかし、今後、偏差値の交換価値は大暴落が予想されます。そうです生成AIの登場です。「正解」にアクセスする能力において生成AIには敵いません。これまで偏差値の高い人が目指してきたホワイトカラーが、必要とされなくなってきたのです。

今の世の中は複雑で多様です。一つの評価軸で上位にいる人の価値観では、課題が解決できなくなってきました。このような時代に求められるべき本当の学力は「問いを立てる力」だとか「課題解決能力」と呼ばれるような使用価値の高い能力なのではないのでしょうか。中村 哲という人がいました。中村は「100の診療所より1本の用水路を」と、大きな川の水を用水路で引き込み砂漠を緑に変え、アフガニスタンの70万人の命を救いました。用水路は、現地の人々が持つ資機材で作れるものでなければ意味がありませんでした。そうでなければ持続可能ではないですから・・・中村は何度も何度も失敗しましたが、なんと江戸時代の治水技術を学ぶことで用水路づくりに成功しました。中村は九州大学医学部の出身ですから、もちろん交換価値のある学力も高かったのですが、名誉欲とか金銭欲とは無縁の人でした。彼は己の能力を人々のためだけに使いました。中村と対談経験のある養老孟司によれば、中村は自分がいつか殺されるということも知っていました（養老孟司「さかさま人間学」(ZouSan Books)）。ということは、自分の能力はおろか自分の命さえも人々のために投げ出したことになります。ここでもう一度、冒頭に紹介したちょうど100年前のペーター・ペーターゼンの言葉を確認してみてください。中村の生き方に重なるのではないのでしょうか。

私はみなさんに「成熟した大人」に成長して欲しいと願っています。成熟した人は「自分には何が必要か」を配慮するのと同じくらい（あるいはそれ以上に）「この社会には何が必要か」を思量します。そういう人は「金になるか、ならないか」よりも「世の中の役に立つか、立たないか」を考えます。その仕事の交換価値より使用価値を重く見るということです。我利我利亡者たちが年収何億円稼ごうが、彼らがいなくなっても誰も困りません。交換価値は抜群に高いが、使用価値はゼロに近いということになります。中村さんは70万のアフガニスタンの人々にとって「いないと困る」人でした。

誰かにとって「いないと困る」そんな人を目指しませんか。



図書館からのおすすめ絵本

図書館オリジナルキャラクター
ブックろう

図書館では、家族と一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪

『ねないこ どのこ』

こんな人におすすめ

寝る前の1冊をお探しの方へ



『ねないこ どのこ』
フィリス・ルート著・作
スーザン・ゲイバー イラスト
野の水生 翻訳
フレーベル館

日暮れの牧場に、10匹のこひつじがいました。かあさんひつじが「おやすみなさい」と声をかけても、みんなはまだまだ眠たくありません。

夕暮れの空に、だんだんと星が瞬き、まん丸なお月様が浮かびます。元気いっぱいひつじたちは、牧場の中を遊び回っているうちに、1匹、また1匹と眠ってしまうのでした。「ねないこ どのこ、なんびきだ?」というかけ声で、こひつじたちを数えているうちに、きっとあなたも眠たくなっていくことでしょう。

絵の美しさと、詩のようなリズムカルで優しい文章が魅力的な、寝る前の読み聞かせにピッタリな1冊です。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財シリーズ!
第14回

「滑川町の歴史」 part14

古墳時代の滑川町～古墳を飾る埴輪－馬と馬具～

今年の干支は午年ですが、古墳には動物埴輪として馬形埴輪がよく置かれます。

また、金銅製などの豪華な馬具は副葬品として古墳などに埋葬されることがあります。馬や飼育技術・馬具などは、今から約1500年前の古墳時代中期(5世紀頃)に朝鮮半島から倭(日本)に伝わってきたとされています。当時の朝鮮半島では、北部の高句麗が強力な騎馬軍団を持ち南下を始め、南部の百済や加耶諸国などと先進技術や鉄資源の確保などのため交流のあった倭は、援軍要請に応え高句麗と交戦します。その中で、自分たちも馬が必要だと考え、百済や加耶から馬匹や馬具の生産技術を持つ人々を呼び寄せ、河内平野(現大阪府付近)に拠点(牧)を置き、列島各地に牧(牧場)を設置し、生産したと言われています。

軍事だけではなく、移動・農耕・荷役などでも次第に使われ、群馬県では、牧が置かれていた古墳時代から馬の生産が盛んで、県名の由来ともされています。当時、馬具も貴重でそれを持つことが権力の象徴でもあり、古墳などに埋葬されました。県内でも行田市將軍山古墳群の馬に付けた冑(馬冑)を始め、鐙や杏葉など馬具約60例の出土が各地で確認されています。

滑川町では、牧の存在や古墳などからの馬具の出土は今のところありませんが、月輪古墳群など町内の古墳からは馬具を付けた馬形埴輪が複数見つかっています。

★町内の古墳出土の馬形埴輪の一部をエコミュージアムセンターにて展示します!

○展示期間:5/1(金)～5/31(日) 10:00～17:00
(毎週月曜日、及び5/3～5/6、5/17は、休館日のため休展)



エコミュージアムセンター
オリジナルキャラクター



月輪古墳群出土の馬形埴輪

